

2022年度 名古屋芸術大学 入学試験問題

学校推薦型選抜 一般推薦入学試験

入試問題

試験科目：「小論文」

日 程：2021年11月20日(土)

試験時間：50分 / 解答字数：600～800 字程度

芸術学部 芸術学科 音楽領域

(ウインドアカデミー、ワールドミュージック・カルチャー、サウンドメディア・コンポジション、ミュージックエンターテインメント・ディレクション、音楽総合コース)

【課題】

昨今のコロナ禍のようなパンデミック(※1)社会に於いて「音楽」は不要不急(※2)なのでしょうか？

①と②、いずれかの立場に立って論旨を展開してください。

パンデミック社会に於いて

- ①音楽は不要不急。
- ②音楽は不要不急ではない。

【※1 パンデミック:広範囲に及ぶ流行病】【※2 不要不急:する必要もなく、また、急ぐ必要もないこと。とりわけ重要でもない用事などについていう。なければならないで困らず、特に急いで揃える必要のない品物などにも用いる。】

【出題の意図等】 ※問題用紙には記載されません。

① の場合の解答例

パンデミック社会で最優先されるべきは「命」と、それを守る「医療」だと思います。

音楽は心に寄り添い、人々を、時には最良の状態といって良いほど豊かにしてくれます。他の全ての芸術、自然の美しい風景、美味しい食べ物、かけがえのない愛する存在、宗教で信仰する神様、その全てが同じ力を持っていることでしょう。これらの全ては各々の人に「個人的」にとっても大切なもので、「常にある」ものとも言えます。そして「常にあるもの」に対して「不要不急なのか?!」という“問い”には違和感も感じます。

「常にある」音楽を不要不急と言うのは、主に人を集めたライブや演奏会の開催など、音楽家の仕事に対してではないかとも思われます。パンデミック社会に於いて不要不急でないと言える仕事は、命を守るという最優先の目的を考えますと、治療や研究で直接的に状況に対処や対応の出来る「医療」だけではないでしょうか？

以上の考えから、状況に直接的に対処する力はない「音楽」がパンデミック社会に於いて「不要不急」の扱いになるのもやむを得ないと思います。私は「音楽」が大好きです。だから常にあるべき音楽そのものを否定するつもりは全くありません。

② の場合の解答例

パンデミック社会で最も優先されるべきは「命」と、それを守る「医療」だと思います。それはつまり、医者や研究者という専門家に最大の効果を生む活動をして頂くことです。その能力を最大限に引き出してもらおう上で、音楽の効果は、決して小さくないのではないのでしょうか？

音楽は人に良い効果をもたらし、心を非常に良い状態にする力は否定されないものの、医者や様々な医療技術のように病気を治したり、症状をいやせる直接的な力を持ってはいません。だからパンデミック社会に於いては不要不急ともされてしまいがちです。

しかし多くの人を救う医術を施すのは、高い専門知識や技術を持っている専門家ではありますが「人」です。その人達にベストのパフォーマンスをしてもらうために音楽が与えられる好影響は、アスリートや軍隊の例を言わずとも明白で、侮れないと思います。音楽はパンデミック社会に於いてこそ、その力を以て（全力で）サポートすべきなのです。

そして現実には、その医療も及ばず自宅待機で「死」に向かう状況も見られます。医療が人に寄り添えない現実の中で、音楽は医療も及ばないところに赴きます。そして心に寄り添い、慰め、励まし、魂の尊厳を取り戻す力を「持たない」とは言えないと思います。

人を集めてライブをするということではなく、音楽を伝える形は社会情勢に合わせたものを慎重に考えることは言うまでもありません。しかし、以上の観点から私は、パンデミック社会に「音楽」は不要不急などでは決してないのだと思います。